



WPCR-10604

Sammy Walker Sammy Walker

西海岸のフォーク・サーキットにもウッドストックの匂いを発散させたフォークな歌手が存在した。その名はサミー・ウォーカー。フィル・オクスに才能を認められてフォーク歌手となった。初期作品はディランのヴォーカル、ギターを彷彿とさせたが、ワーナー盤は渋いフォーク・ロック・サウンドで登場した。



VSCD-087

Arlo Guthrie Last Of Brooklyn Cowboys

アメリカン・フォークの父、ウディ・ガスリーの息子アーロ・ガスリーの軽快なカントリー・ロック作品。ゲストにバック・オウエンズ・バンドの面々、ライ・クーダー、クラレンス・ホワイト、ジェシ・エド・デイヴィスなどを迎えての録音。今日「ルーツ・ロック」の最高峰をいく名盤と騒がれている。



WPCR-10308

Barbara Keith Barbara Keith

ロスアンジェルス、つまり西海岸のスワンプ・ミュージックといえば誰もがレオン・ラッセルを思い浮かべるに違いない。が、バーバラ・キースの本盤もその手のファンの間では、永らく名盤と語られてきた。ディラン・カヴァーの「見張り塔からずっと」が最高。ゲストのギター奏者、ローウェル・ジョージも見事。



TOCP-53125

Country Gazette Don't Give Up Your Day Job

お洒落な都市型ブルーグラス・バンドとして人気があったのが、爽快なハーモニー・コーラスを売り物としたカントリー・ガゼットだった。もちろんハーモニーのお手本は、クロスビー、スティル、ナッシュ&ヤングたちだ。ということで一番の聴き所は、C S N & Yのヒット・カバー「ティーチ・ユア・チルドレン」。



vscd-091-092

Guthrie Thomas Sittin' Crooked

LAフォーク・サーキットから誕生した名盤。ランプリング・ジャック・エリオットやウディ・ガスリーに影響され、その後内省的なヴォーカルで評判をとったガスリー・トーマスの記念すべきデビュー・アルバム。オリジナル・ピニール盤は、「幻の私家版」としてロック・マニアにまだ騒がれている。



POCM-2031

The Flying Burrito Brothers The Last Of The Red Hot Burritos

事実上のラスト・アルバム。カントリー・ガゼットのメンバーも参加して、ブルーグラス・ロックまで披露する。グラム・パーソンズの顔は見えないが、クリス・ヒルマンが大健闘。アル・パーキンスのペダル・スティール・ギターも気持ちよい。が、「デヴィル・イン・ディスガイズ」の爽快なサウンドもたまらない。



VSCD-264

The Kingston Trio An Evening With The Kingston Trio

モダン・フォーク・ブーム最大の功労者が、キングストン・トリオだった。キャンパス・フォーク・シーンの人気者で、縦じまのシャツが良く似合う青年たちだった。「花は何処へいったの」「トム・ドゥーリー」「MTA」などのヒット曲でお馴染みだろう。シンガー・ソングライター、ジョン・スチュアートも在籍。



VSCD-1476(I)

Buck Owens Together Again

ロッキン・ビートをともなったカントリー・ロックは、60年代に栄えた西海岸カントリー「ベイカーズフィールド・サウンド」をお手本としたものだった。グラム・パーソンズ、エミルウ・ハリスその他が敬愛してやまなかったのが、このシーンの大御所バック・オウエンスだった。炸裂のテレキャスターに大注目だ。